

〔一般論文〕

# 大学教員の性的指向・性自認(SOGI)についての 知識と態度に関する全国調査報告（第2報） —— 知識・抵抗感・存在認知等と属性（性別・年齢・学問分野） の関連について ——

風間 孝・釜野 さおり・北仲千里・林夏生・藤原直子

## 1 研究の背景と目的

近年、大学において性的マイノリティ学生への支援の動きが広がりつつある。実際に、日本学生支援機構が「LGBT への対応についての全学的な方針」を作成しているか調査した結果によれば、2019 年では 7.7%であったが<sup>1</sup>、2021 年では 15.3%へと増加していた（日本学生支援機構 2019; 2021）。

性的少数者への取り組みが進んだ背景についてはすでに（風間他 2022）にて述べているため、ここで簡潔に確認しておきたい。一つめは、2015 年に文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通知を発出して以降、小学校・中学校・高等学校において性自認を尊重されてきた、性別違和を持つ児童・生徒が大学に入学する状況が既に生まれていることである（文部科学省 2015; 2016）。二つめは、2015 年に同性愛者であることを同級生の友人から暴露（アウトティング）された大学院生が一橋大学で転落死をするという出来事が発生し、遺族により大学と暴露した同級生を相手に損害賠償訴訟が提起された

ことである。三つめは、2018年に日本学生支援機構が「大学等における性的指向・性自認の多様な在り方の理解増進に向けて」（冊子）を発行したことである（日本学生支援機構2018）。最後に、2020年6月より施行された労働施策総合推進法（パワハラ防止法）にもとづき制定されたパワハラ防止指針は、企業だけでなく大学もまた対象にしていることがあげられる（厚生労働省2020）。

これ以降の高等教育にかかわりうる状況として、以下3点を述べたい。まず文部科学省は2022年12月に小学校から高等学校における段階的な生徒指導の理論・考え方を示す「生徒指導提要」の改訂を行ない、「性的マイノリティ」とされる児童生徒への配慮と、他の児童生徒への配慮との均衡を取りながら支援を進めることなど、学校現場における生徒指導上の留意点が記載された。性的マイノリティの児童生徒への配慮が改めて求められたことは、高等教育機関においても引き継がれるべきであるとの機運を高めていくであろう。つぎに全国の自治体においてパートナーシップ制度およびファミリーシップ制度の導入が進んでいる点である。渋谷区とNPO法人・虹色ダイバーシティによる共同調査によれば、2023年6月28日時点で導入自治体は328を数え、その人口カバー率は7割を超えている（虹色ダイバーシティ2023）。性的マイノリティの教職員のカップルを家族として福利厚生の対象とするにあたって、自治体におけるパートナーシップおよびファミリーシップ宣誓を要件とする大学が出てくるなど自治体による制度の導入は大学の取り組みにも影響を及ぼしている。三つ目として2023年6月に成立した「性的指向およびジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」は、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解増進の施策の推進に関し、基本理念を定め」、大学を含む事業主等に対して「普及啓発、就業環境の整備、相談の機会の確保」に努めるよう定めている。同法の成立は、今後の大学における取り組みに関しての推進力になっていくと考えら

れる。

高等教育をめぐるこのような状況を踏まえて、我々はこれまで大学における性の多様性や性的マイノリティ支援の取り組みを進めるうえでの課題を検討するために、2020年に全国の大学を対象に性的指向・性自認に関する施策及び取り組みに関する調査を行った（風間他 2021）。また2021年には全国の大学の専任教員を対象に抽出調査を行い、大学教員の知識や意識等に関して単純集計の結果を公表している（風間他 2022）。また大学教員調査をもとにして大学教員の性的指向・性自認に関する認識が一般市民よりも高いことを明らかにした（釜野 2022）。

これらの結果を踏まえ、本稿では大学教員の知識や認識、態度等に関して、さらなる分析をおこなう。具体的には、2021年に実施した大学教員調査をもとにして、性的指向・性自認および性的マイノリティに関する知識・認識・態度と、性別や年齢、学問分野の関連性についての検討を行う。そのことにより、性的マイノリティ支援を進める上での課題を明らかにしたい。

## 2 方法

まず各大学（791校）のホームページから教員リスト（180,980人）を作成した。その後、一定の間隔に従って対象を抽出し、1792人632校に調査票を郵送した。調査期間は、2021年5月21日～8月31日であり、回答は郵送、もしくはウェブ画面に入力してもらった。ただし郵送した教員の内、退職等の理由により返送されたものを除いたため最終的な対象数は1743人となった。回収数は677人、回収率は38.8%であった<sup>2</sup>。

なお、本稿では①知識、②困難についての認識、③抵抗感、④周囲の存在認知、⑤性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験、⑥差別的言動の認知、⑦性的マイノリティ学生への対応に関する項目と、性別、年

齢、そして学問分野の関連性を $\chi^2$ 検定ならびに残差分析を用いて検討した。なお、以下の表において $\chi^2$ 検定および残差分析によって有意確率が10%以下の場合は表中の $\chi^2$ 値および標準化残差に網掛けをした。また有意確率については、表に\*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , †  $p<0.1$ として示した。

分析に当たっては、性的マイノリティについての意識に関する全国調査(釜野他 2015; 2019)等の先行研究を踏まえて、①性別に関しては、男性よりも女性の方が知識・困難についての認識・存在の認知・出会った経験・差別的言動の認知の割合が高く、抵抗感が弱い、②年齢に関しては、年齢の低い方が知識・困難についての認識・存在の認知・出会った経験・差別的言動の認知・授業実践の割合が高く、抵抗感が弱い、との仮説を立てた。また③学問分野に関しては、科研費の旧分類をもとに、理工・農・複合、人文社会、医歯薬学の3つに分類した<sup>3</sup>。性的マイノリティについての意識調査と学問分野の関連についての調査が管見の限り行われていないため、理工・農・複合および医歯薬学よりも性的マイノリティへの取り組みが広がりつつある社会の動向に敏感であると思われる人文社会は知識・困難についての認識・存在の認知・出会った経験・差別的言動の認知・授業実践の割合が高く、抵抗感が弱い、また医歯薬学と理工・農・複合の間には顕著な差は見られない、との仮説を立てた。

### 3 結果

#### (1) 回答者の属性

##### ①性別(表1)

女性 28.8% (n=195)、男性 69.3% (n=469)、その他 0.6% (n=4)であった。なお、その他については、回答数が少なく、統計処理が難しいため分析に当たっては除外した。

表1 性別割合

	回答者数	割合
女性	195	28.8%
男性	469	69.3%
その他	4	0.6%
合計	677	100.0%

## ②年齢（表2）

40代が32.3%（n=219）と最も多く、ついで50代28.8%（n=195）、60代以上21.1%（n=143）、20-30代16.7%（n=113）であった。

表2 年齢割合

	回答者数	割合
25-39歳	113	16.7%
40-49歳	219	32.3%
50-59歳	195	28.8%
60歳 -	143	21.1%
無回答	7	1.1%
合計	677	100.0%

## ③学問分野（表3）

理工・農・複合が39.1%（n=265）と最も多く、ついで人文社会30.0%（n=203）、医歯薬学28.2%（n=191）の順であった。

表3 学問分野割合

	回答者数	割合
理工農複合	265	39.1%
人文社会	203	30.0%
医歯薬	191	28.2%
その他	7	1.0%
無回答	11	1.6%
合計	677	100.0%

## (2) 性別との関連性について

ここからは性別と以下①～⑦の項目の関連性を、 $\chi^2$  検定を用いて検討する。なお  $\chi^2$  検定の有意確率は、Fisher の直接法による正確な有意確率（両側）を用いた。

### ①性的マイノリティについての知識（表 4）

性別と知識の関連性を明らかにするため、 $\chi^2$  検定を用いて検討した。なお、知識項目の設問への回答選択肢は「はい」「いいえ」「わからない」の3択とし、表では設問に対し正答を選択した場合を「正答」、誤答と「わからない」を選択した場合は「その他」として示した。

全12項目中3項目（「日本では性同一性障害を理由とした戸籍の性別変更が認められている【正答：はい】」、「文部科学省は性的マイノリティの児童生徒への配慮を求める通知を出している【正答：はい】」、「日本には男性の戸籍をもつトランスジェンダー学生の入学を認めている女子大学がある【正答：はい】」では女性の正答率が1%水準で有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

また「同性愛とトランスジェンダーは同じである【正答：いいえ】」、「身体の性は男と女の2つである【正答：いいえ】」、「学生支援機構はLGBT等の学生が学生生活を送る上での支援のあり方について記した冊子を発行している【正答：はい】」の3項目で女性の正答率が有意に高い傾向であった（ $p<0.1$ ）。

### ②性的マイノリティが経験する困難についての認識（表 5）

性別と性的マイノリティが経験する困難についての認識について尋ねた項目の関連性を、 $\chi^2$  検定を用いて検討したところ、「同性愛者や両性愛者の学生は、性的指向のために大学生活の中で困難に遭遇しやすい」において女性の方が困難について認識する割合が1%水準で有意に高く（ $p<0.01$ ）、「トランスジェンダーの学生は、性自認や性表現のために大学

表4 性別と知識項目のクロス表

知識	性別	正答	その他	合計	$\chi^2$ 値
同性愛とトランスジェンダーは同じである	女性	94.3%	5.7%	194	3.92 †
	男性	89.5%	10.5%	465	
	合計	90.9%	9.1%	659	
WHO は同性愛を精神疾患とみなす	女性	69.1%	30.9%	194	0.41
	男性	66.5%	33.5%	469	
	合計	67.3%	32.7%	663	
WHO は性同一性障害を精神疾患とみなす	女性	58.0%	42.0%	193	0.02
	男性	58.6%	41.4%	469	
	合計	58.5%	41.5%	662	
日本では戸籍の性別変更が認められる	女性	60.6%	39.4%	193	14.51**
	男性	44.3%	55.7%	467	
	合計	49.1%	50.9%	660	
身体の性別は2つである	女性	66.5%	33.5%	194	3.02 †
	男性	59.3%	40.7%	469	
	合計	61.4%	38.6%	663	
パートナーシップ証明書を発行する自治体なし	女性	82.0%	18.0%	194	1.15
	男性	78.3%	21.7%	469	
	合計	79.3%	20.7%	663	
文科省は通知を出している	女性	68.6%	31.4%	194	10.41**
	男性	55.0%	45.0%	469	
	合計	59.0%	41.0%	663	
学生支援機構は冊子を発行している	女性	43.3%	56.7%	194	3.38 †
	男性	35.7%	64.3%	468	
	合計	37.9%	62.1%	662	
トランスジェンダー学生の入学を認める女子大がある	女性	61.9%	38.1%	194	14.08**
	男性	45.8%	54.2%	469	
	合計	50.5%	49.5%	663	
性別を変更した人は五輪に参加できない	女性	42.3%	57.7%	194	0.02
	男性	42.9%	57.1%	469	
	合計	42.7%	57.3%	663	
保護者から訴えられた大学あり	女性	42.8%	57.2%	194	1.49
	男性	37.7%	62.3%	467	
	合計	39.2%	60.8%	661	
性的マイノリティはメンタルヘルス上のリスク抱えやすい	女性	85.1%	14.9%	194	5.21
	男性	77.2%	22.8%	469	
	合計	79.5%	20.5%	663	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。X<sup>2</sup>検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率（両側）を用いた。

生活の中で困難に遭遇しやすい」で女性の方が困難について認識する割合が有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。

表5 性別と困難についての認識のクロス表

困難についての認識	性別	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
世の中では性的マイノリティをめぐる問題は 対応すべき課題になっている	女性	98.5%	1.5%	195	0.66
	男性	97.4%	2.6%	468	
	合計	97.7%	2.3%	663	
同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のため 大学生生活の中で困難に遭遇しやすい	女性	94.4%	5.6%	195	7.11**
	男性	87.4%	12.6%	467	
	合計	89.4%	10.6%	662	
トランスジェンダーの学生は性自認や性表現の ために大学生生活の中で困難に遭遇しやすい	女性	96.9%	3.1%	195	2.98 †
	男性	93.6%	6.4%	468	
	合計	94.6%	5.4%	663	
同性愛者や両性愛者の学生は性的指向の ために就職活動の中で困難に遭遇しやすい	女性	75.9%	24.1%	195	1.48
	男性	80.1%	19.9%	468	
	合計	78.9%	21.1%	663	
トランスジェンダーの学生は性自認や性表現の ために就職活動の中で困難に遭遇しやすい	女性	90.3%	9.7%	195	0.46
	男性	91.9%	8.1%	468	
	合計	91.4%	8.6%	663	

※有意確率は、\*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , †  $p<0.1$ として示した。 $\chi^2$ 検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率(両側)を用いた。

### ③性的マイノリティへの抵抗感(表6)

性別と性的マイノリティへの抵抗感について尋ねた項目の関連性について $\chi^2$ 検定を用いて検討したところ、すべての項目、すなわち知人が同性愛者の場合、同僚が同性愛者の場合、ゼミの学生が同性愛者の場合、きょうだいが同性愛者の場合、知人がトランスジェンダーの場合、同僚がトランスジェンダーの場合、ゼミの学生がトランスジェンダーの場合、きょうだいがトランスジェンダーの場合、のいずれにおいても女性の抵抗感が1%水準で有意に低かった ( $p<0.01$ )。



表6 性別と抵抗感のクロス表

抵抗感	性別	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
知人が同性愛者だったら抵抗がある	女性	8.7%	91.3%	195	16.07**
	男性	21.8%	78.2%	467	
	合計	18.0%	82.0%	662	
同僚が同性愛者だったら抵抗がある	女性	6.2%	93.8%	195	16.04**
	男性	18.2%	81.8%	466	
	合計	14.7%	85.3%	661	
担当するゼミに同性愛者の学生がいたら抵抗がある	女性	4.6%	95.4%	195	8.62**
	男性	12.1%	87.9%	463	
	合計	9.9%	90.1%	658	
きょうだい同性愛者だったら抵抗がある	女性	21.5%	78.5%	195	11.95**
	男性	35.2%	64.8%	466	
	合計	31.2%	68.8%	661	
知人がトランスジェンダーだったら抵抗がある	女性	4.6%	95.4%	195	15.51**
	男性	15.7%	84.3%	465	
	合計	12.4%	87.6%	660	
同僚がトランスジェンダーだったら抵抗がある	女性	3.6%	96.4%	194	15.57**
	男性	14.2%	85.8%	465	
	合計	11.1%	88.9%	659	
担当するゼミにトランスジェンダーの学生がいたら抵抗がある	女性	3.1%	96.9%	195	8.83**
	男性	9.9%	90.1%	464	
	合計	7.9%	92.1%	659	
きょうだいトランスジェンダーだったら抵抗がある	女性	17.9%	82.1%	195	15.47**
	男性	33.1%	66.9%	465	
	合計	28.6%	71.4%	660	

※有意確率は、\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < 0.1$  として示した。 $\chi^2$ 検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率（両側）を用いた。

#### ④性的マイノリティの存在認知（表7）

知人、友人、親戚、家族に性的マイノリティはいるか、「いる」「そうかもしれない人がある」「いないと思う」「いない」の4択で尋ね、表では前の2つの選択肢と後ろの2つの選択肢を合計した値を示した。 $\chi^2$ 検定の

結果、「いる・そうかもしれない人がいる」と答えた割合は女性の方が1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。

表7 性別と性的マイノリティの存在認知のクロス表

存在の認知	性別	いる・ そうかも しれない	いないと 思う・ いない	合計	$\chi^2$ 値
知人、友人、親戚、家族に性的マイノリティはいる	女性	55.2%	44.8%	194	9.92**
	男性	41.8%	58.2%	467	
	合計	45.7%	54.3%	661	

※有意確率は、\*\*  $p<0.01$ , \*  $p<0.05$ , †  $p<0.1$  として示した。 $\chi^2$  検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率(両側)を用いた。

#### ⑤性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験(表8)

同性愛や両性愛の学生・教職員およびトランスジェンダーの学生・教職員と出会った経験を「学生・教職員と出会ったことがある」、「そうかもしれない学生・教職員がいた」を合計し、「ない」と比較した。 $\chi^2$  検定の結果、女性の方が大学でトランスジェンダーの学生と「出会ったことがある・そうかもしれない学生がいた」と回答した割合が有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。他の3項目に関しては、有意差はみられなかった。

#### ⑥性的マイノリティへの差別的言動の認知(表9)

勤務している大学で同性愛や両性愛、トランスジェンダー等に関する否定的・差別的言動を見たり聞いたりした経験を、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ない」の4択で尋ね、表では前者2つを「ある」、後者2つを「ない」と表記した。性別と差別的言動を認知した割合の関連性を、 $\chi^2$  検定を用いて検討したところ、女性の方が差別的言動を認知した割合が1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。

表8 性別と性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験のクロス表

出会った経験	性別	ある・ そうかも しれない	ない	合計	χ <sup>2</sup> 値
大学で同性愛・両性愛の学生に会った	女性	44.1%	55.9%	195	1.40
	男性	39.1%	60.9%	465	
	合計	40.6%	59.4%	660	
大学でトランスジェンダーの学生に会った	女性	45.6%	54.4%	195	3.92 †
	男性	37.4%	62.6%	463	
	合計	39.8%	60.2%	658	
大学で同性愛・両性愛の教職員に 会ったことがある	女性	16.9%	83.1%	195	1.16
	男性	20.6%	79.4%	467	
	合計	19.5%	80.5%	662	
大学でトランスジェンダーの教職員に 会ったことがある	女性	13.8%	86.2%	195	0.62
	男性	16.3%	83.7%	467	
	合計	15.6%	84.4%	662	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。X<sup>2</sup>検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率（両側）を用いた。

表9 性別と性的マイノリティへの差別的言動の認知のクロス表

差別的言動の認知	性別	ある	ない	合計	χ <sup>2</sup> 値
大学で性的マイノリティ等に関する否定的・ 差別的言動を見聞きしたことがある	女性	19.5%	80.5%	195	7.28**
	男性	11.5%	88.5%	468	
	合計	13.9%	86.1%	663	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。X<sup>2</sup>検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率（両側）を用いた。

### ⑦性的マイノリティ学生への対応についての認識（表10）

性的マイノリティ学生への対応についての認識を「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4択で尋ね、表では前者2つを【そう思う】、後者2つを【そう思わない】と表記した。そのうえで性別と性的マイノリティ学生への対応についての認識の関連性を検討するため、χ<sup>2</sup>検定を用いて検討したところ、「戸籍

の性別はプライバシーである」と「女子大はトランスジェンダー学生を受け入れた方がよい」では女性の方が【そう思う】と回答した割合が1%水準で有意に高く ( $p<0.01$ )、また「多目的トイレは障害者のみが使用すべきである」では【そう思う】と回答した男性の割合が1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。また「性的マイノリティの学生がいる場合は、教員間で情報共有した方がよい」、「性的マイノリティではないかと思う学生がいたら、配慮することがないか、教員から尋ねたほうがよい」、「信仰を理由に否定する学生を注意できない」では性別による有意な差は見られなかった。

表 10 性別と性的マイノリティ学生への対応についての認識のクロス表

性的マイノリティ学生への対応	性別	そう思う	そう思わない	合計	$\chi^2$ 値
戸籍の性別はプライバシーである	女性	88.1%	11.9%	193	14.77**
	男性	74.6%	25.4%	464	
	合計	78.5%	21.5%	657	
多目的トイレは身体障がい者のみ使うべきである	女性	2.1%	97.9%	194	8.06**
	男性	7.9%	92.1%	468	
	合計	6.2%	93.8%	662	
性的マイノリティの学生がいる場合は情報共有した方がよい	女性	51.8%	48.2%	195	0.26
	男性	54.0%	46.0%	465	
	合計	53.3%	46.7%	660	
性的マイノリティと思う学生がいたら配慮の必要があるか尋ねた方がよい	女性	30.9%	69.1%	194	0.81
	男性	27.5%	72.5%	466	
	合計	28.5%	71.5%	660	
女子大はトランスジェンダー女性を受け入れた方がよい	女性	83.5%	16.5%	194	23.55**
	男性	64.5%	35.5%	462	
	合計	70.1%	29.9%	656	
信仰を理由に同性愛やトランスジェンダーを否定する発言をしている学生がいても教員は注意できない	女性	33.8%	66.2%	195	0.28
	男性	31.7%	68.3%	463	
	合計	32.4%	67.6%	658	

※有意確率は、\*\*  $p<0.01$ , \*  $p<0.05$ , †  $p<0.1$  として示した。 $\chi^2$ 検定の有意確率は、Fisherの直接法による正確な有意確率(両側)を用いた。

## ⑧まとめ

先行研究を踏まえて、男性よりも女性の方が知識・困難についての認識・存在の認知・出会った経験・差別的言動の認知の割合が高く、抵抗感が低いとの仮説を立て、分析をおこなった。結果、女性のほうが知識をもち、困難について認識し、抵抗感が弱く、また周囲に性的マイノリティが存在していることを認知している割合が高く、差別的言動の認知する割合も高かった。これらについては仮説に沿った結果になったといえる。

一方で、「性的マイノリティ学生への対応についての認識」の設問である「性的少数者の学生がいる場合は、教員間で情報共有した方がよい」、「性的少数者ではないかと思う学生がいたら、配慮することがないか、教員から尋ねたほうがよい」では性別による有意な差は見られなかった。性別に関わらずアウトティングや、カミングアウトの強制につながる認識を持っていることが明らかになった。

## (3) 年齢との関連性について

つぎに、年齢と以下①～⑦の項目の関連性を、 $\chi^2$ 検定および残差分析を用いて検討する。

### ①性的マイノリティについての知識（表11）

年齢と知識の関連性を $\chi^2$ 検定で検討したところ、「WHOは新しい診断基準で同性愛を精神疾患と見なしている【正答：いいえ】」、「WHOは新しい診断基準で性同一性障害を精神疾患と見なしている【正答：いいえ】」、「学生支援機構はLGBT等の学生生活を送る上での支援のあり方について記した冊子を発行している【正答：はい】」の3項目で年齢による人数比率の差が1%水準で有意であった（ $p < 0.01$ ）。

「WHOは新しい診断基準で同性愛を精神疾患と見なしている」では、残差分析により誤答と「わからない」の合計を意味する「その他」の割合

が60代以上において全体と比べ5%水準で有意に低かった ( $p < 0.05$ )。

つぎに「WHOは新しい診断基準で性同一性障害を精神疾患と見なしている」では60代以上の正答割合が全体と比べ5%水準で有意に高く ( $p < 0.05$ )、「その他」の割合が60代以上において1%水準で有意に低かった ( $p < 0.01$ )。また40代の「その他」の割合が有意に高い傾向であった ( $p < 0.1$ )。

「学生支援機構はLGBT等の学生生活を送る上での支援のあり方について記した冊子を発行している」では、全体と比べ20-30代の正答割合が1%水準で有意に低く ( $p < 0.01$ )、「その他」の割合が5%水準で有意に高かった ( $p < 0.05$ )。

つぎに「文科省は性的マイノリティの児童生徒に配慮を求める通知を発出している【正答：はい】」、「日本には男性の戸籍をもつトランスジェンダー学生の入学を認めている女子大学がある【正答：はい】」では、 $\chi^2$ 検定の結果、年齢による人数比率の差が5%水準で有意であった ( $p < 0.05$ )。

「文科省は性的マイノリティの児童生徒に配慮を求める通知を発出している」では、残差分析により全体と比べ「その他」の割合が20-30代で有意に高くなっていた ( $p < 0.05$ )。

また「日本には男性の戸籍をもつトランスジェンダー学生の入学を認めている女子大学がある」では、残差分析の結果、全体と比べ20-30代の正答割合が有意に低い傾向であり ( $p < 0.1$ )、「その他」の割合が有意に高い傾向であった ( $p < 0.1$ )。

最後に「日本では性同一性障害を理由とした戸籍の性別変更が認められている」では年代による比率の差は有意傾向であったが ( $p < 0.1$ )、残差分析の結果、いずれの年代においても有意差は見られなかった。

表 11 年齢と知識項目のクロス表

知識項目	年齢	正答	その他	合計	$\chi^2$ 値
同性愛とトランスジェンダーは同じである	25-39	90.2%	9.8%	112	1.59
	標準化 残差	-0.1	0.3		
	40-49	90.0%	10.0%	219	
	標準化 残差	-0.2	0.5		
	50-59	90.7%	9.3%	193	
	標準化 残差	0	0.1		
	60-	93.6%	6.4%	141	
	標準化 残差	0.3	-1		
	合計	91.0%	9.0%	665	
WHO は同性愛を精神疾患とみなす	25-39	61.1%	38.9%	113	15.77**
	標準化 残差	-0.8	1.2		
	40-49	60.3%	39.7%	219	
	標準化 残差	-1.3	1.8		
	50-59	70.6%	29.4%	194	
	標準化 残差	0.6	-0.8		
	60-	78.3%	21.7%	143	
	標準化 残差	1.6	-2.3*		
	合計	67.3%	32.7%	669	
WHO は性同一性障害を精神疾患とみなす	25-39	54.0%	46.0%	113	17.27**
	標準化 残差	-0.7	0.8		
	40-49	51.6%	48.4%	219	
	標準化 残差	-1.4	1.7 †		
	50-59	59.6%	40.4%	193	
	標準化 残差	0.1	-0.2		
60-	72.7%	27.3%	143		

	標準化 残差	2.2*	-2.6**		
	合計	58.8%	41.2%	668	
日本では戸籍の性別変更が認められる	25-39	43.8%	56.3%	112	7.30 †
	標準化 残差	-0.9	0.8		
	40-49	56.6%	43.4%	219	
	標準化 残差	1.5	-1.5		
	50-59	47.7%	52.3%	193	
	標準化 残差	-0.3	0.3		
	60-	45.1%	54.9%	142	
	標準化 残差	-0.7	0.7		
	合計	49.4%	50.6%	666	
身体の性別は2つである	25-39	58.4%	41.6%	113	2.44
	標準化 残差	-0.4	0.5		
	40-49	65.3%	34.7%	219	
	標準化 残差	0.7	-0.9		
	50-59	58.8%	41.2%	194	
	標準化 残差	-0.5	0.6		
	60-	62.2%	37.8%	143	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	合計	61.6%	38.4%	669	
パートナーシップ証明書を発行する自治体なし	25-39	77.9%	22.1%	113	2.48
	標準化 残差	-0.2	0.4		
	40-49	82.6%	17.4%	219	
	標準化 残差	0.5	-1		
	50-59	79.9%	20.1%	194	
	標準化 残差	0	-0.1		



	60-	76.2%	23.8%	143	
	標準化 残差	-0.5	0.9		
	合計	79.7%	20.3%	669	
文科省は通知を出している	25-39	47.8%	52.2%	113	10.48*
	標準化 残差	-1.6	2*		
	40-49	65.8%	34.2%	219	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	50-59	57.7%	42.3%	194	
	標準化 残差	0.6	-0.6		
	60-	61.5%	38.5%	143	
	標準化 残差	0.8	-0.8		
	合計	59.5%	40.5%	669	
学生支援機構は冊子を発行している	25-39	20.4%	79.6%	113	19.62**
	標準化 残差	-3.1**	2.4*		
	40-49	42.9%	57.1%	219	
	標準化 残差	1.1	-0.9		
	50-59	38.7%	61.3%	194	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	60-	44.4%	55.6%	142	
	標準化 残差	1.2	-0.9		
合計	38.2%	61.8%	668		
トランスジェンダー学生の入学を認める 女子大がある	25-39	38.9%	61.1%	113	8.76*
	標準化 残差	-1.8 †	1.9 †		
	40-49	51.6%	48.4%	219	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	50-59	54.1%	45.9%	194	

	標準化 残差	0.6	-0.6		
	60-	55.9%	44.1%	143	
	標準化 残差	0.8	-0.8		
	合計	51.1%	48.9%	669	
性別を変更した人は五輪に参加できない	25-39	38.1%	61.9%	113	3.57
	標準化 残差	-0.7	0.6		
	40-49	46.6%	53.4%	219	
	標準化 残差	0.9	-0.8		
	50-59	39.2%	60.8%	194	
	標準化 残差	-0.7	0.6		
	60-	44.8%	55.2%	143	
	合計	42.6%	57.4%	669	
保護者から訴えられた大学あり	25-39	36.6%	63.4%	112	0.45
	標準化 残差	-0.5	0.4		
	40-49	39.4%	60.6%	218	
	標準化 残差	0	0		
	50-59	39.7%	60.3%	194	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	60-	40.6%	59.4%	143	
	合計	39.3%	60.7%	667	
性的マイノリティはメンタルヘルス上の リスク抱えやすい	25-39	85.0%	15.0%	113	2.75
	標準化 残差	0.6	-1.3		
	40-49	79.5%	20.5%	219	
	標準化 残差	0	0		

50-59	77.3%	22.7%	194
標準化 残差	-0.3	0.7	
60-	78.3%	21.7%	143
標準化 残差	-0.2	0.3	
合計	79.5%	20.5%	669

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

## ②性的マイノリティが経験する困難についての認識（表12）

年齢と性的マイノリティが経験する困難についての認識の関連性を $\chi^2$ 検定で検討したところ、5項目中3項目（「同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のために大学生活の中で困難に遭遇しやすい」、「同性愛者や両性愛者の学生は、性的指向のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」、「トランスジェンダーの学生は、性自認や性表現のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」）で年代比率の差が1%水準で有意であった（ $p<0.01$ ）。

「同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のために大学生活の中で困難に遭遇しやすい」では、残差分析の結果、40代の「そう思わない」の割合が全体と比べ5%水準で有意に低く（ $p<0.05$ ）、50代では1%水準で有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

「同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」では、20-30代の「そう思わない」の割合が5%水準で有意に高く（ $p<0.05$ ）、60代以上の「そう思わない」が有意に低い傾向であった（ $p<0.1$ ）。

最後に「トランスジェンダーの学生は性自認や性表現のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」では、20-30代の「そう思わない」の割合が全体と比べ1%水準で有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

表 12 年齢と困難についての認識のクロス表

困難についての認識	年齢	そう思う	そう思わない	合計	$\chi^2$ 値
世の中では性的マイノリティをめぐる問題は対応すべき課題になっている	25-39	99.1%	0.9%	113	4.40
	標準化残差	0.1	-1.0		
	40-49	97.3%	2.7%	219	
	標準化残差	-0.1	0.5		
	50-59	96.4%	3.6%	194	
	標準化残差	-0.2	1.3		
	60-	99.3%	0.7%	143	
	標準化残差	0.2	-1.2		
合計	97.8%	2.2%	669		
同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のため大学生活の中で困難に遭遇しやすい	25-39	91.2%	8.8%	113	19.16**
	標準化残差	0.2	-0.6		
	40-49	94.5%	5.5%	219	
	標準化残差	0.8	-2.4*		
	50-59	81.4%	18.6%	194	
	標準化残差	-1.1	3.3**		
	60-	90.1%	9.9%	142	
	標準化残差	0.1	-0.3		
合計	89.2%	10.8%	668		
トランスジェンダーの学生は性自認や性表現のために大学生活の中で困難に遭遇しやすい	25-39	94.7%	5.3%	113	5.25
	標準化残差	0.0	-0.2		
	40-49	95.4%	4.6%	219	
	標準化残差	0.2	-0.7		
	50-59	91.2%	8.8%	194	
標準化残差	-0.4	1.8 †			

	60-	96.5%	3.5%	143	
	標準化 残差	0.3	-1.1		
	合計	94.3%	5.7%	669	
同性愛者や両性愛者の学生は性的指向の ために就職活動の中で困難に遭遇しやすい	25-39	69.9%	30.1%	113	14.85**
	標準化 残差	-1.0	2.0*		
	40-49	83.1%	16.9%	219	
	標準化 残差	0.8	-1.5		
	50-59	73.2%	26.8%	194	
	標準化 残差	-0.8	1.6		
	60-	85.3%	14.7%	143	
	標準化 残差	0.9	-1.8 †		
	合計	78.5%	21.5%	669	
トランスジェンダーの学生は性自認や性表現 のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい	25-39	83.2%	16.8%	113	14.52**
	標準化 残差	-0.9	2.9**		
	40-49	94.1%	5.9%	219	
	標準化 残差	0.4	-1.4		
	50-59	89.7%	10.3%	194	
	標準化 残差	-0.2	0.7		
	60-	95.1%	4.9%	143	
	標準化 残差	0.5	-1.6		
合計	91.2%	8.8%	669		

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

### ③性的マイノリティへの抵抗感（表13）

年齢と性的マイノリティへの抵抗感の関連性を $\chi^2$ 検定で検討した結果、8項目中4項目で年代比率において1%水準で有意な差がみられた（p<0.01）、1項目において5%水準で有意な差が見られた（p<0.05）。また

1項目で有意な傾向が見られた ( $p<0.1$ )。

年代比率の差が1%水準で有意であった4項目をみていくと、「知人が同性愛者だったら抵抗がある」では、残差分析の結果、「そう思う」と答えた割合が全体と比べ20-30代では5%水準で有意に低く ( $p<0.05$ )、60代以上では5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

「同僚が同性愛者だったら抵抗がある」でも、「そう思う」と答えた割合が20-30代では5%水準で有意に低く ( $p<0.05$ )、60代以上で1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。

「きょうだいが同性愛者だったら抵抗がある」では、残差分析の結果、60代以上に「そう思う」と答えた割合が全体と比べ5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

「きょうだいがトランスジェンダーだったら抵抗がある」では、残差分析の結果、60代以上において「そう思う」と答えた割合が1%水準で有意に高く ( $p<0.01$ )、「そう思わない」が5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。

つぎに年代比率の差が5%水準で有意であった「担当するゼミに同性愛者の学生がいたら抵抗がある」では、残差分析の結果、60代以上に「そう思う」と答えた割合が5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

最後に年代比率の差が有意傾向であった「同僚がトランスジェンダーだったら抵抗がある」では、全体と比べ60代以上に「そう思う」と答えた割合が5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

表 13 年齢と抵抗感についての認識のクロス表

抵抗感	年齢	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
知人が同性愛者だったら抵抗がある	25-39	10.6%	89.4%	113	12.59**
	標準化 残差	-1.8*	0.8		
	40-49	13.7%	86.3%	219	

	標準化 残差	-1.4	0.6		
	50-59	21.1%	78.9%	194	
	標準化 残差	1.1	-0.5		
	60-	24.6%	75.4%	142	
	標準化 残差	1.98*	-0.9		
	合計	17.7%	82.3%	668	
同僚が同性愛者だったら抵抗がある	25-39	7.1%	92.9%	113	14.61**
	標準化 残差	-2.1*	0.9		
	40-49	12.3%	87.7%	219	
	標準化 残差	-0.9	0.4		
	50-59	15.0%	85.0%	193	
	標準化 残差	0.2	-0.1		
	60-	23.2%	76.8%	142	
	標準化 残差	2.7**	-1.1		
	合計	14.5%	85.5%	667	
担当するゼミに同性愛者の学生がいたら 抵抗がある	25-39	7.1%	92.9%	113	8.82*
	標準化 残差	-0.9	0.3		
	40-49	6.4%	93.6%	219	
	標準化 残差	-1.6	0.5		
	50-59	11.4%	88.6%	193	
	標準化 残差	0.7	-0.2		
	60-	15.1%	84.9%	139	
	標準化 残差	2.0*	-0.7		
	合計	9.8%	90.2%	664	
きょうだい同性愛者だったら抵抗がある	25-39	24.8%	75.2%	113	14.27**
	標準化 残差	-1.2	0.8		

	40-49	25.1%	74.9%	219	
	標準化 残差	-1.5	1.0		
	50-59	32.6%	67.4%	193	
	標準化 残差	0.4	-0.3		
	60-	42.3%	57.7%	142	
	標準化 残差	2.4*	-1.6		
	合計	30.9%	69.1%	667	
知人がトランスジェンダーだったら 抵抗がある	25-39	8.0%	92.0%	113	3.44
	標準化 残差	-1.3	0.5		
	40-49	11.9%	88.1%	219	
	標準化 残差	-0.2	0.1		
	50-59	13.0%	87.0%	192	
	標準化 残差	0.3	-0.1		
	60-	15.5%	84.5%	142	
	標準化 残差	1.1	-0.4		
	合計	12.3%	87.7%	666	
同僚がトランスジェンダーだったら 抵抗がある	25-39	8.0%	92.0%	113	6.33 †
	標準化 残差	-1.0	0.3		
	40-49	8.7%	91.3%	218	
	標準化 残差	-1.0	0.4		
	50-59	11.4%	88.6%	193	
	標準化 残差	0.2	-0.1		
	60-	16.3%	83.7%	141	
	標準化 残差	1.91*	-0.7		
	合計	11.0%	89.0%	665	
担当するゼミにトランスジェンダーの学生 がいたら抵抗がある	25-39	5.3%	94.7%	113	4.86



	標準化 残差	-1.0	0.3		
	40-49	5.9%	94.1%	219	
	標準化 残差	-1.0	0.3		
	50-59	8.8%	91.2%	193	
	標準化 残差	0.5	-0.1		
	60-	11.4%	88.6%	140	
	標準化 残差	1.5	-0.4		
	合計	7.8%	92.2%	665	
きょうだい が トランスジェンダー だった ら 抵抗 がある	25-39	23.0%	77.0%	113	16.21**
	標準化 残差	-1.1	0.7		
	40-49	22.8%	77.2%	219	
	標準化 残差	-1.5	1.0		
	50-59	28.5%	71.5%	193	
	標準化 残差	0.0	0.0		
	60-	41.1%	58.9%	141	
	標準化 残差	2.8**	-1.8*		
合計	28.4%	71.6%	666		

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

#### ④性的マイノリティの存在認知（表14）

年齢と知人、友人、親戚、家族に性的マイノリティがいるかについての回答の関連性について $\chi^2$ 検定を行ったところ、年代比率の差が1%水準で有意であった（ $p<0.01$ ）。残差分析をおこなったところ、60代で「いる・そうかもしれない人がいる」と答えた割合は有意に少なく（ $p<0.05$ ）、「いないと思う・いない」と答えた割合は有意に多かった（ $p<0.05$ ）。

表 14 年齢と性的マイノリティの存在認知についての認識のクロス表

存在の認知	年齢	いる・ そうかも もしれない	いないと 思う・ いない	合計	$\chi^2$ 値
知人、友人、親戚、家族に性的マイノリティ はいる	25-39	50.4%	49.6%	113	14.13**
	標準化 残差	0.8	-0.7		
	40-49	51.8%	48.2%	218	
	標準化 残差	1.4	-1.3		
	50-59	44.6%	55.4%	195	
	標準化 残差	-0.2	0.2		
	60-	32.6%	67.4%	141	
	標準化 残差	-2.3*	2.1*		
	合計	45.4%	54.6%	667	

※有意確率は、\*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , †  $p<0.1$ として示した。

### ⑤性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験 (表 15)

年齢と同性愛や両性愛、トランスジェンダーの学生・教職員と出会った経験の関連性について  $\chi^2$  検定を用いて検討したところ、4項目中2項目で年代比率の差が1%水準で有意であった。

「勤務している大学で同性愛・両性愛の学生に出会ったことがある」では、残差分析の結果、「ある・そうかもしれない」と答えた割合は、20-30代において全体と比べ5%水準で有意に低く ( $p<0.05$ )、「ない」と答えた割合が5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

「勤務している大学でトランスジェンダーの学生に出会ったことがある」に「ある・そうかもしれない」と答えた割合は、全体と比べ20-30代において5%水準で有意に低く ( $p<0.05$ )、50代で有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。また「ない」の回答割合では、全体と比べ20-30代の割合が有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。

表 15 年齢と性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験のクロス表

出会った経験	性別	ある・ そうかも しれない	ない	合計	$\chi^2$ 値
大学で同性愛・両性愛の学生に会った	25-39	25.9%	74.1%	112	12.92**
	標準化 残差	-2.4*	2*		
	40-49	45.7%	54.3%	219	
	標準化 残差	1.3	-1.0		
	50-59	43.0%	57.0%	193	
	標準化 残差	0.6	-0.5		
	60-	39.4%	60.6%	142	
	標準化 残差	-0.2	0.1		
合計	40.2%	59.8%	666		
大学でトランスジェンダーの学生に会った	25-39	26.5%	73.5%	113	12.60**
	標準化 残差	-2.2*	1.7 †		
	40-49	40.4%	59.6%	218	
	標準化 残差	0.2	-0.2		
	50-59	46.9%	53.1%	192	
	標準化 残差	1.7 †	-1.3		
	60-	37.6%	62.4%	141	
	標準化 残差	-0.3	0.3		
合計	39.3%	60.7%	664		
大学で同性愛・両性愛の教職員に会ったこと がある	25-39	14.2%	85.8%	113	4.64
	標準化 残差	-1.2	0.6		
	40-49	21.9%	78.1%	219	
	標準化 残差	1.0	-0.5		
50-59	21.1%	78.9%	194		

	標準化 残差	0.7	-0.3		
	60-	15.5%	84.5%	142	
	標準化 残差	-1.0	0.5		
	合計	19.0%	81.0%	668	
大学でトランスジェンダーの教職員に会った ことがある	25-39	9.8%	90.2%	112	3.26
	標準化 残差	-1.5	0.6		
	40-49	16.4%	83.6%	219	
	標準化 残差	0.4	-0.2		
	50-59	17.0%	83.0%	194	
	標準化 残差	0.6	-0.3		
	60-	15.5%	84.5%	142	
	標準化 残差	0.1	0.0		
	合計	15.3%	84.7%	667	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

### ⑥性的マイノリティへの差別的言動の認知 (表 16)

年齢と差別的言動の認知割合の関連性について $\chi^2$ 検定を用いて検討したところ、年代比率の差が5%水準で有意であった ( $p<0.05$ )。残差分析の結果、60代以上の差別的言動を見聞きしたことが「ある」と答えた割合が全体と比べ5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。

表 16 年齢と性的マイノリティへの差別的言動の認知のクロス表

差別的言動の認知	性別	ある	ない	合計	$\chi^2$ 値
大学で性的マイノリティ等に関する否定的・ 差別的言動を見聞きしたことがある	25-39	15.9%	84.1%	113	8.23*
	標準化 残差	0.6	-0.2		
	40-49	17.8%	82.2%	219	

標準化 残差	1.6	-0.6	
50-59	12.4%	87.6%	194
標準化 残差	-0.5	0.2	
60-	7.7%	92.3%	143
標準化 残差	-2.0*	0.8	
合計	13.8%	86.2%	669

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

### ⑦性的マイノリティ学生への対応についての認識（表 17）

年齢と性的マイノリティ学生への対応の認識についての関連性を $\chi^2$ 検定で検討したところ、6項目中1項目（「性的マイノリティの学生がいる場合は、教職員間で情報共有した方がよい」）で年代比率の差が5%水準で有意であり（ $p<0.05$ ）、もう1つの項目（「性的マイノリティと思う学生がいたら、配慮することがないか、教員から尋ねた方がよい」）では有意な傾向が見られた（ $p<0.1$ ）。しかし、残差分析の結果、いずれの項目も年代間に有意な差は見られなかった。

表 17 年齢と性的マイノリティ学生への対応についての認識のクロス表

性的マイノリティ学生への対応	年齢	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
戸籍の性別はプライバシーである	25-39	77.9%	22.1%	113	1.49
	標準化 残差	-0.1	0.2		
	40-49	80.3%	19.7%	218	
	標準化 残差	0.3	-0.6		
	50-59	75.8%	24.2%	190	
	標準化 残差	-0.4	0.8		

	60-	80.1%	19.9%	141	
	標準化 残差	0.2	-0.4		
	合計	78.5%	21.5%	662	
多目的トイレは身体障がい者のみ使うべきである	25-39	8.8%	91.2%	113	1.99
	標準化 残差	1.2	-0.3		
	40-49	5.5%	94.5%	219	
	標準化 残差	-0.4	0.1		
	50-59	6.2%	93.8%	193	
	標準化 残差	0.0	0.0		
	60-	4.9%	95.1%	143	
	標準化 残差	-0.6	0.2		
	合計	6.1%	93.9%	668	
性的マイノリティの学生がいる場合は、 教職員間で情報共有した方がよい	25-39	47.8%	52.2%	113	8.39*
	標準化 残差	-0.8	0.8		
	40-49	47.5%	52.5%	219	
	標準化 残差	-1.1	1.2		
	50-59	56.5%	43.5%	191	
	標準化 残差	0.7	-0.7		
	60-	60.8%	39.2%	143	
	標準化 残差	1.3	-1.4		
合計	53.0%	47.0%	666		
性的マイノリティと思う学生がいたら、配慮 することがないか、教員から尋ねた方がよい	25-39	28.3%	71.7%	113	6.27 †
	標準化 残差	0.0	0.0		
	40-49	22.5%	77.5%	218	
	標準化 残差	-1.6	1.0		
	50-59	33.3%	66.7%	192	

	標準化 残差	1.3	-0.8		
	60-	30.1%	69.9%	143	
	標準化 残差	0.4	-0.3		
	合計	28.2%	71.8%	666	
女子大はトランスジェンダー女性を 受け入れた方がよい	25-39	70.8%	29.2%	113	4.27
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	40-49	74.8%	25.2%	218	
	標準化 残差	0.8	-1.2		
	50-59	65.4%	34.6%	191	
	標準化 残差	-0.8	1.3		
	60-	70.0%	30.0%	140	
	合計	70.4%	29.6%	662	
信仰を理由に同性愛やトランスジェンダーを 否定する発言をしている学生がいても教員は 注意できない	25-39	34.5%	65.5%	113	6.14
	標準化 残差	0.4	-0.3		
	40-49	37.0%	63.0%	219	
	標準化 残差	1.2	-0.8		
	50-59	25.8%	74.2%	190	
	標準化 残差	-1.6	1.1		
	60-	33.1%	66.9%	142	
	合計	32.5%	67.5%	664	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

## ⑧まとめ

先行研究を踏まえて、年齢の低い方が知識・困難についての認識・存在

の認知・出会った経験・差別的言動の認知の割合が高く、抵抗感が低いとの仮説を立て、分析を行った。

分析の結果、20-30代は性的マイノリティへの抵抗感が弱かった。また60代以上は抵抗感が強く、周囲に存在していると答える割合も低く、差別的言動の認知割合も低かった。これらについては仮説に沿った結果であった。

一方で、20-30代が必ずしも性的マイノリティについての知識を持っておらず、性的マイノリティが経験する困難についても十分に認識していないことが明らかになった。また60代以上は項目によっては知識を有していた。また、性的少数者への対応についての認識に関しては年代間に有意な差は見られず、年代に関わらずアウティング防止への意識が希薄であった。これらに関しては、仮説に沿わない結果となった。

#### (4) 学問分野との関連性について

ここからは、学問分野と以下①～⑦の項目の関連性を、 $\chi^2$ 検定および残差分析を用いて検討する。

##### ①性的マイノリティについての知識 (表 18)

学問分野と知識項目の関連について $\chi^2$ 検定を用いて検討したところ、学問分野間の比率において12項目中4項目では1%水準で( $p < 0.01$ )、2項目では5%水準で有意差がみられ( $p < 0.05$ )、1項目では有意な傾向がみられた( $p < 0.1$ )。

まず「WHOは新しい診断基準で同性愛を精神疾患と見なしている【正答：いいえ】」、「WHOは新しい診断基準で性同一性障害を精神疾患と見なしている【正答：いいえ】」、「日本には男性の戸籍をもつトランスジェンダー学生の入学を認めている女子大学がある【正答：はい】」、「性的マイノリティはメンタルヘルス上のリスクを抱えやすい【正答：はい】」



では、 $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率の差が1%水準で有意であった ( $p<0.01$ )。

「WHO は新しい診断基準で同性愛を精神疾患と見なしている」では、残差分析の結果、全体と比べ人文社会の正答割合が5%水準で有意に高く ( $p<0.05$ )、医歯薬学の正答割合が5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。誤答と「わからない」の合計を意味する「その他」の割合では、残差分析の結果、人文社会では1%水準で有意に低く ( $p<0.01$ )、医歯薬学の割合が1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。

「WHO は新しい診断基準で性同一性障害を精神疾患と見なしている」では、残差分析の結果、正答割合では人文社会が全体と比べ有意に高い傾向であり ( $p<0.1$ )、医歯薬学の正答割合が5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。「その他」の割合では、人文社会では5%水準で有意に低く ( $p<0.05$ )、医歯薬学の割合が1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。

「日本には男性の戸籍をもつトランスジェンダー学生の入学を認めている女子大学がある」では、人文社会において正答割合が全体と比べ有意に高い傾向であり ( $p<0.1$ )、「その他」の割合が5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。

また「性的マイノリティはメンタルヘルス上のリスクを抱えやすい」では、残差分析により、医歯薬学の「その他」の割合が全体と比べ1%水準で有意に低かった ( $p<0.01$ )。

つぎに「同性愛とトランスジェンダーは同じである【正答：いいえ】」、  
「日本には同性カップルにパートナー証明書を発行している自治体はない【正答：いいえ】」では、 $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率の差が5%水準で有意であった。

「同性愛とトランスジェンダーは同じである」では、「その他」において、全体と比べて人文社会の割合が有意に低い傾向であり ( $p<0.1$ )、理工・農・複合の割合が有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。

「日本には同性カップルにパートナー証明書を発行している自治体はない」では、人文社会の「その他」の割合が全体と比べ5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。

「身体の性別は男と女の2つである【正答：いいえ】」では、 $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率の差が有意な傾向であったが ( $p<0.1$ )、残差分析により、学問分野間に有意な差はみられなかった。

表 18 学問分野と知識項目のクロス表

知識項目	学問分野	正答	その他	合計	$\chi^2$ 値
同性愛とトランスジェンダーは同じである	理工農複合	87.8%	12.2%	262	7.35*
	標準化残差	-0.5	1.7 †		
	人文社会	95.0%	5.0%	202	
	標準化残差	0.6	-1.9 †		
	医歯薬	91.1%	8.9%	191	
	標準化残差	0.0	-0.1		
	合計	91.0%	9.0%	655	
WHO は同性愛を精神疾患とみなす	理工農複合	65.6%	34.4%	265	24.72**
	標準化残差	-0.3	0.5		
	人文社会	79.8%	20.2%	203	
	標準化残差	2.1*	-3.1**		
	医歯薬	56.5%	43.5%	191	
	標準化残差	-1.8*	2.7**		
	合計	67.5%	32.5%	659	
WHO は性同一性障害を精神疾患とみなす	理工農複合	60.4%	39.6%	265	21.36**
	標準化残差	0.4	-0.4		

	人文社会	68.5%	31.5%	203	
	標準化 残差	1.8 †	-2.2*		
	医歯薬	45.8%	54.2%	190	
	標準化 残差	-2.3*	2.8**		
	合計	58.7%	41.3%	658	
日本では戸籍の性別変更が認められる	理工農 複合	45.8%	54.2%	264	2.33
	標準化 残差	-0.7	0.7		
	人文社会	53.0%	47.0%	202	
	標準化 残差	0.8	-0.8		
	医歯薬	48.9%	51.1%	190	
	標準化 残差	0.0	0.0		
	合計	48.9%	51.1%	656	
身体の性別は2つである	理工農 複合	57.0%	43.0%	265	5.89 †
	標準化 残差	-1.0	1.3		
	人文社会	68.0%	32.0%	203	
	標準化 残差	1.2	-1.5		
	医歯薬	61.3%	38.7%	191	
	標準化 残差	-0.1	0.1		
	合計	61.6%	38.4%	659	
パートナーシップ証明書を発行する自治体なし	理工農 複合	75.1%	24.9%	265	8.97*
	標準化 残差	-0.8	1.5		
	人文社会	86.2%	13.8%	203	
	標準化 残差	1.1	-2.1*		
	医歯薬	78.0%	22.0%	191	

	標準化 残差	-0.2	0.4		
	合計	79.4%	20.6%	659	
文科省は通知を出している	理工農 複合	57.0%	43.0%	265	1.98
	標準化 残差	-0.4	0.5		
	人文社会	63.1%	36.9%	203	
	標準化 残差	0.7	-0.9		
	医歯薬	57.6%	42.4%	191	
	標準化 残差	-0.3	0.3		
	合計	59.0%	41.0%	659	
	学生支援機構は冊子を発行している	理工農 複合	36.2%	63.8%	
標準化 残差		-0.5	0.4		
人文社会		40.1%	59.9%	202	
標準化 残差		0.4	-0.4		
医歯薬		38.7%	61.3%	191	
標準化 残差		0.1	-0.1		
合計		38.1%	61.9%	658	
トランスジェンダー学生の入学を認める 女子大がある	理工農 複合	48.7%	51.3%	265	11.81**
	標準化 残差	-0.5	0.5		
	人文社会	60.6%	39.4%	203	
	標準化 残差	1.9 †	-2.0*		
	医歯薬	44.0%	56.0%	191	
	標準化 残差	-1.4	1.4		
	合計	51.0%	49.0%	659	
性別を変更した人は五輪に参加できない	理工農 複合	44.5%	55.5%	265	0.78

	標準化 残差	0.4	-0.4		
	人文社会	43.3%	56.7%	203	
	標準化 残差	0.1	-0.1		
	医歯薬	39.8%	60.2%	191	
	標準化 残差	-0.6	0.5		
	合計	42.8%	57.2%	659	
保護者から訴えられた大学あり	理工農 複合	36.1%	63.9%	263	3.24
	標準化 残差	-0.9	0.7		
	人文社会	44.3%	55.7%	203	
	標準化 残差	1.1	-0.9		
	医歯薬	39.3%	60.7%	191	
	標準化 残差	-0.1	0.1		
	合計	39.6%	60.4%	657	
性的マイノリティはメンタルヘルス上の リスク抱えやすい	理工農 複合	75.1%	24.9%	265	14.08**
	標準化 残差	-0.8	1.5		
	人文社会	75.9%	24.1%	203	
	標準化 残差	-0.5	1.0		
	医歯薬	88.5%	11.5%	191	
	標準化 残差	1.4	-2.8**		
	合計	79.2%	20.8%	659	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

## ②性的マイノリティが経験する困難についての認識（表19）

学問分野と性的マイノリティが経験する困難についての認識の関連性について $\chi^2$ 検定を用いて検討したところ、学問分野間の比率に関して5項

目中 2 項目において 5%水準で有意な差が見られ ( $p<0.05$ )、1 項目で有意な傾向が見られた ( $p<0.1$ )。

5%水準で有意であった 2 項目のうち、「同性愛者や両性愛者の学生は、性的指向のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」では、残差分析の結果、「そう思わない」の割合が理工・農・複合では全体と比べ有意に高い傾向であり ( $p<0.1$ )、人文社会では全体と比べ有意に低い傾向であった ( $p<0.1$ )。

つぎに「トランスジェンダーの学生は、性自認や性表現のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい」では、理工・農・複合の「そう思わない」の割合が全体と比べ 5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。

また、有意な傾向がみられた「同性愛者や両性愛者の学生は、性的指向のために大学生生活のなかで困難に遭遇しやすい」では、人文社会の「そう思わない」の割合が全体と比べ有意に低い傾向であった ( $p<0.1$ )。

表 19 学問分野と困難についての認識のクロス表

困難についての認識	学問分野	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
世の中では性的マイノリティをめぐる問題は 対応すべき課題になっている	理工農 複合	97.4%	2.6%	265	0.75
	標準化 残差	-0.1	0.7		
	人文社会	98.5%	1.5%	203	
	標準化 残差	0.1	-0.7		
	医歯薬	97.9%	2.1%	190	
	標準化 残差	0.0	-0.1		
	合計	97.9%	2.1%	658	
同性愛者や両性愛者の学生は性的指向のため 大学生生活の中で困難に遭遇しやすい	理工農 複合	86.7%	13.3%	264	4.98 †
	標準化 残差	-0.4	1.2		

大学教員の性的指向・性自認（SOGI）についての  
 知識と態度に関する全国調査報告（第2報）（風間・釜野・北仲・林・藤原）（251） 16

	人文社会	93.1%	6.9%	203	
	標準化 残差	0.6	-1.7 †		
	医歯薬	88.4%	11.6%	190	
	標準化 残差	-0.1	0.3		
	合計	89.2%	10.8%	657	
トランスジェンダーの学生は、性自認や性表現 のために大学生活の中で困難に遭遇しやすい	理工農 複合	93.2%	6.8%	265	3.94
	標準化 残差	-0.2	0.8		
	人文社会	97.0%	3.0%	203	
	標準化 残差	0.4	-1.6		
	医歯薬	93.2%	6.8%	190	
	標準化 残差	-0.2	0.7		
	合計	94.4%	5.6%	658	
同性愛者や両性愛者の学生は、性的指向のため に就職活動の中で困難に遭遇しやすい	理工農 複合	73.2%	26.8%	265	8.44*
	標準化 残差	-0.9	1.8 †		
	人文社会	84.2%	15.8%	203	
	標準化 残差	0.9	-1.8 †		
	医歯薬	79.5%	20.5%	190	
	標準化 残差	0.2	-0.3		
	合計	78.4%	21.6%	658	
トランスジェンダーの学生は、性自認や性表現 のために就職活動の中で困難に遭遇しやすい	理工農 複合	87.5%	12.5%	265	7.41*
	標準化 残差	-0.6	2.0*		
	人文社会	94.1%	5.9%	203	
	標準化 残差	0.4	-1.4		
	医歯薬	93.2%	6.8%	190	

	標準化 残差	0.3	-0.9		
	合計	91.2%	8.8%	658	

※有意確率は、\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < 0.1$  として示した。

### ③性的マイノリティへの抵抗感 (表 20)

学問分野と性的マイノリティへの抵抗感についての関連性を  $\chi^2$  検定で検討したところ、学問分野の比率に関して8項目中3項目において1%水準で有意であり ( $p < 0.01$ )、2項目では5%水準で有意な差がみられた ( $p < 0.05$ )。また、1項目で有意な傾向であった ( $p < 0.1$ )。

「知人が同性愛者だったら抵抗がある」、「きょうだい同性愛者だったら抵抗がある」、「きょうだいがトランスジェンダーだったら抵抗がある」では学問分野の比率の差が1%水準で有意であった ( $p < 0.01$ )。

「知人が同性愛者だったら抵抗がある」では、残差分析の結果、全体と比べ「そう思う」の割合が人文社会では1%水準で有意に低く ( $p < 0.01$ )、医歯薬学では5%水準で有意に高かった ( $p < 0.05$ )。

「きょうだい同性愛者だったら抵抗がある」では、「そう思う」の割合が全体と比べ人文社会では1%水準で有意に低く ( $p < 0.01$ )、医歯薬学が1%水準で有意に高かった ( $p < 0.01$ )。また「そう思わない」では人文社会が有意に高い傾向であり ( $p < 0.1$ )、医歯薬学が有意に少ない傾向であった ( $p < 0.1$ )。

「きょうだいがトランスジェンダーだったら抵抗がある」では、全体と比べ人文社会の「そう思う」が5%水準で有意に低く ( $p < 0.05$ )、医歯薬学で有意に高い傾向であった ( $p < 0.1$ )。

つぎに「大学の同僚が同性愛者だったら抵抗がある」、「知人がトランスジェンダーだったら抵抗がある」では  $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率の差が5%水準で有意であった ( $p < 0.05$ )。

「大学の同僚が同性愛者だったら抵抗がある」では、「そう思う」の割合



が全体と比べ人文社会では5%水準で有意に少なかった ( $p < 0.05$ )。

「知人がトランスジェンダーだったら抵抗がある」では、「そう思う」の割合が全体と比べ人文社会では有意に低い傾向であり ( $p < 0.1$ )、医歯薬学で有意に高い傾向であった ( $p < 0.1$ )。

最後に「大学の同僚がトランスジェンダーだったら抵抗がある」では  $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率の差が有意傾向であったが ( $p < 0.1$ )、残差分析を行ったところ全体と比べ、学問分野間に有意な差は見られなかった。

表 20 学問分野と抵抗感についての認識のクロス表

抵抗感	学問分野	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
知人が同性愛者だったら抵抗がある	理工農 複合	18.9%	81.1%	265	15.06**
	標準化 残差	0.5	-0.2		
	人文社会	9.9%	90.1%	202	
	標準化 残差	-2.7**	1.3		
	医歯薬	24.7%	75.3%	190	
	標準化 残差	2.2*	-1.0		
	合計	17.8%	82.2%	657	
同僚が同性愛者だったら抵抗がある	理工農 複合	16.7%	83.3%	264	7.36*
	標準化 残差	0.9	-0.4		
	人文社会	8.9%	91.1%	202	
	標準化 残差	-2.1*	0.9		
	医歯薬	17.4%	82.6%	190	
	標準化 残差	1.0	-0.4		
	合計	14.5%	85.5%	656	

担当するゼミに同性愛者の学生がいたら抵抗がある	理工農複合	9.9%	90.1%	263	0.16
	標準化残差	0.1	0.0		
	人文社会	9.0%	91.0%	201	
	標準化残差	-0.3	0.1		
	医歯薬	10.1%	89.9%	189	
	標準化残差	0.2	-0.1		
	合計	9.6%	90.4%	653	
きょうだいが同性愛者だったら抵抗がある	理工農複合	31.1%	68.9%	264	20.82**
	標準化残差	0.1	-0.1		
	人文社会	20.3%	79.7%	202	
	標準化残差	-2.7**	1.8 †		
	医歯薬	41.6%	58.4%	190	
	標準化残差	2.6**	-1.8 †		
	合計	30.8%	69.2%	656	
知人がトランスジェンダーだったら抵抗がある	理工農複合	12.1%	87.9%	264	8.32*
	標準化残差	0.3	-0.1		
	人文社会	7.4%	92.6%	202	
	標準化残差	-1.9 †	0.7		
	医歯薬	16.9%	83.1%	189	
	標準化残差	1.9 †	-0.7		
	合計	12.1%	87.9%	655	
同僚がトランスジェンダーだったら抵抗がある	理工農複合	10.2%	89.8%	264	5.07 †
	標準化残差	-0.3	0.1		
	人文社会	7.9%	92.1%	202	

	標準化 残差	-1.3	0.4		
	医歯薬	14.9%	85.1%	188	
	標準化 残差	1.7	-0.6		
	合計	10.9%	89.1%	654	
担当するゼミにトランスジェンダーの学生が いたら抵抗がある	理工農 複合	8.0%	92.0%	264	1.06
	標準化 残差	0.8	-0.2		
	人文社会	5.9%	94.1%	202	
	標準化 残差	-1.1	0.3		
	医歯薬	8.5%	91.5%	188	
	標準化 残差	0.2	0.0		
	合計	7.5%	92.5%	654	
きょうだいがトランスジェンダーだったら 抵抗がある	理工農 複合	28.8%	71.2%	264	10.42**
	標準化 残差	0.2	-0.1		
	人文社会	20.8%	79.2%	202	
	標準化 残差	-2.0*	1.3		
	医歯薬	35.4%	64.6%	189	
	標準化 残差	1.9 †	-1.2		
	合計	28.2%	71.8%	655	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

#### ④性的マイノリティの存在認知（表 21）

学問分野別と知人や友人、親戚、家族に性的少数者がいるかについての回答との関連性を $\chi^2$ 検定で検討した結果、学問分野間の比率に関して1%水準で有意であった（ $p<0.01$ ）。残差分析をおこなったところ、「いる・そうかもしれない人がいる」と答えた割合は全体と比べ、理工・農・複合では1%水準で有意に低く（ $p<0.01$ ）、人文社会では1%水準で有意に高

かった ( $p<0.01$ )。また「いないと思う・いない」と答えた割合は理工・農・複合では5%水準で有意に高く ( $p<0.05$ )、人文社会では1%水準で有意に低かった ( $p<0.01$ )。

表 21 学問分野と性的マイノリティの存在認知についての認識のクロス表

抵抗感	学問分野	いる・ そうかも しれない	いないと 思う・ いない	合計	$\chi^2$ 値
知人、友人、親戚、家族に性的マイノリティはいる	理工農 複合	34.7%	65.3%	262	43.96**
	標準化 残差	-2.6**	2.4*		
	人文社会	64.5%	35.5%	203	
	標準化 残差	4.0**	-3.7**		
	医歯薬	40.3%	59.7%	191	
	標準化 残差	-1.1	1.0		
	合計	45.6%	54.4%	656	

※有意確率は、\*\*  $p<0.01$ , \*  $p<0.05$ , †  $p<0.1$ として示した。

### ⑤性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験 (表 22)

学問分野と同性愛や両性愛、トランスジェンダーの学生・教職員と出会った経験の関連性を $\chi^2$ 検定で検討した結果、「勤務している大学で同性愛・両性愛の学生に出会ったことがある」、「勤務している大学でトランスジェンダーの学生に出会ったことがある」、「勤務している大学で同性愛・両性愛の教職員に出会ったことがある」では学問分野間の比率に関して1%水準で有意差があり ( $p<0.01$ )、「勤務している大学でトランスジェンダーの教職員に出会ったことがある」では5%水準で有意であった ( $p<0.05$ )。

「勤務している大学で同性愛・両性愛の学生に出会ったことがある」では、残差分析の結果、全体と比べ「ある・そうかもしれない」の割合が理

工・農・複合では有意に低い傾向であり ( $p<0.1$ )、人文社会では1%水準で有意に高かった ( $p<0.01$ )。また「ない」の割合では人文社会が1%水準で有意に低かった ( $p<0.01$ )。

「勤務している大学でトランスジェンダーの学生に出会ったことがある」では、「ある・そうかもしれない」の割合が全体と比べ人文社会では5%水準で有意に高く ( $p<0.05$ )、理工・農・複合で5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。また「ない」の割合では人文社会が有意に低い傾向であり ( $p<0.1$ )、理工・農・複合が有意に多い傾向であった ( $p<0.1$ )。

「勤務している大学で同性愛・両性愛の教職員に出会ったことがある」では、残差分析の結果、「ある・そうかもしれない」の割合が全体と比べ人文社会では1%水準で有意に高く ( $p<0.01$ )、理工・農・複合では5%水準で有意に低かった ( $p<0.05$ )。

「勤務している大学でトランスジェンダーの教職員に出会ったことがある」では、残差分析の結果、「ある・そうかもしれない」の割合が、全体と比べ理工・農・複合において有意に低い傾向であった ( $p<0.1$ )。

表 22 学問分野と性的マイノリティの学生・教職員と出会った経験のクロス表

出会った経験	学問分野	ある・ そうか もしれ ない	ない	合計	$\chi^2$ 値
大学で同性愛・両性愛の学生に会った	理工農 複合	33.0%	67.0%	264	23.05**
	標準化 残差	-1.9 †	1.5		
	人文社会	54.0%	46.0%	202	
	標準化 残差	3.1**	-2.5**		
	医歯薬	36.0%	64.0%	189	
	標準化 残差	-0.9	0.8		
	合計	40.3%	59.7%	655	

大学でトランスジェンダーの学生に会った	理工農 複合	30.7%	69.3%	264	17.01**
	標準化 残差	-2.2*	1.8 †		
	人文社会	49.5%	50.5%	200	
	標準化 残差	2.3*	-1.8 †		
	医歯薬	40.7%	59.3%	189	
	標準化 残差	0.3	-0.2		
	合計	39.4%	60.6%	653	
大学で同性愛・両性愛の教職員に 会ったことがある	理工農 複合	12.5%	87.5%	264	18.26**
	標準化 残差	-2.5*	1.2		
	人文社会	28.2%	71.8%	202	
	標準化 残差	2.9**	-1.4		
	医歯薬	18.8%	81.2%	191	
	標準化 残差	-0.1	0.0		
	合計	19.2%	80.8%	657	
大学でトランスジェンダーの教職員に 会ったことがある	理工農 複合	10.6%	89.4%	263	7.26*
	標準化 残差	-1.9 †	0.8		
	人文社会	17.8%	82.2%	202	
	標準化 残差	0.9	-0.4		
	医歯薬	18.8%	81.2%	191	
	標準化 残差	1.3	-0.5		
	合計	15.2%	84.8%	656	

※有意確率は、\*\* p<.01, \* p<.05, † p<0.1として示した。

#### ⑥性的マイノリティへの差別的言動の認知 (表 23)

学問分野と差別的言動の認知の関連性を $\chi^2$ 検定で検討したところ、学

問分野間の比率に関して1%水準で有意差が見られた（ $p<0.01$ ）。残差分析の結果、全体と比べ差別的言動を見聞きしたことが「ある」と答えた割合は、理工・農・複合では5%水準で有意に少なく（ $p<0.05$ ）、人文社会では有意に多い傾向であった（ $p<0.1$ ）。

表 23 学問分野と性的マイノリティへの差別的言動の認知のクロス表

差別的言動の認知	学問分野	ある	ない	合計	$\chi^2$ 値
大学でセクマイ等に関する否定的・差別的言動を見聞きしたことがある	理工農複合	8.7%	91.3%	265	9.47**
	標準化残差	-2.1*	0.8		
	人文社会	18.2%	81.8%	203	
	標準化残差	1.9 †	-0.7		
	医歯薬	14.7%	85.3%	190	
	標準化残差	0.5	-0.2		
	合計	13.4%	86.6%	658	

※有意確率は、\*\*  $p<0.01$ , \*  $p<0.05$ , †  $p<0.1$ として示した。

### ⑦性的マイノリティ学生への対応についての認識（表 24）

学問分野と性的マイノリティ学生への対応についての認識との関連性について $\chi^2$ 検定で検討した結果、「性的マイノリティと思う学生がいたら、配慮することがないか、教員から尋ねた方がよい」、「女子大学は女性として生活している男性戸籍のトランスジェンダー学生を受け入れた方がよい」で学問分野の比率において1%水準で有意であり（ $p<0.01$ ）、「大学の多目的トイレは身体障害者のみを使うべきである」、「信仰を理由に同性愛やトランスジェンダーを否定する発言をしている学生がいても教員は注意できない」では、学問分野の比率において5%水準で有意であった（ $p<0.05$ ）。

まず1%水準で有意であった2項目のうち、「性的マイノリティと思う

学生がいたら、配慮することがないか、教員から尋ねた方がよい」では、残差分析の結果、全体と比べ医歯薬学において【そう思う】の割合が1%水準で有意に高く ( $p<0.01$ )、【そう思わない】の割合が有意に低い傾向であった ( $p<0.1$ )。つぎに「女子大学は女性として生活している男性戸籍のトランスジェンダー学生を受け入れた方がよい」では、全体と比べ【そう思う】の割合が人文社会で有意に高い傾向であり ( $p<0.1$ )、【そう思わない】では人文社会において1%水準で有意に低く ( $p<0.01$ )、理工・農・複合で有意に高い傾向であった ( $p<0.1$ )。

5%水準で有意であった「大学の多目的トイレは身体障害者のみを使うべきである」では、全体と比べ【そう思う】の割合が人文社会で有意に低い傾向であり ( $p<0.1$ )、理工・農・複合では5%水準で有意に高かった ( $p<0.05$ )。「信仰を理由に同性愛やトランスジェンダーを否定する発言をしている学生がいても教員は注意できない」では、人文社会の【そう思う】の割合が全体と比べ有意に低い傾向であった ( $p<0.1$ )。

「戸籍の性別はプライバシーである」では  $\chi^2$  検定の結果、学問分野の比率において有意な傾向であり ( $p<0.1$ )、残差分析の結果、有意な差は見られなかった。

表 24 学問分野と性的マイノリティ学生への対応についての認識のクロス表

性的マイノリティ学生への対応	学問分野	そう思う	そう 思わない	合計	$\chi^2$ 値
戸籍の性別はプライバシーである	理工農 複合	74.7%	25.3%	261	5.82 †
	標準化 残差	-0.7	1.4		
	人文社会	84.0%	16.0%	200	
	標準化 残差	0.9	-1.6		
	医歯薬	78.4%	21.6%	190	



	標準化 残差	0.0	0.1		
	合計	78.6%	21.4%	651	
多目的トイレは身体障がい者のみ使うべきである	理工農 複合	9.1%	90.9%	265	7.80*
	標準化 残差	2.0*	-0.5		
	人文社会	3.0%	97.0%	203	
	標準化 残差	-1.8 †	0.5		
	医歯薬	5.3%	94.7%	190	
	標準化 残差	-0.5	0.1		
	合計	6.1%	93.9%	658	
性的マイノリティの学生がいる場合は、 教職員間で情報共有した方がよい	理工農 複合	52.7%	47.3%	264	0.57
	標準化 残差	-0.1	0.1		
	人文社会	52.0%	48.0%	202	
	標準化 残差	-0.2	0.2		
	医歯薬	55.6%	44.4%	189	
	標準化 残差	0.5	-0.5		
	合計	53.3%	46.7%	655	
性的マイノリティと思う学生がいたら、配慮 することがないか、教員から尋ねた方がよい	理工農 複合	24.2%	75.8%	264	14.13**
	標準化 残差	-1.2	0.8		
	人文社会	23.8%	76.2%	202	
	標準化 残差	-1.2	0.8		
	医歯薬	38.6%	61.4%	189	
	標準化 残差	2.7**	-1.7 †		
	合計	28.2%	71.8%	655	
女子大はトランスジェンダー女性を 受け入れた方がよい	理工農 複合	64.8%	35.2%	264	15.52**

	標準化 残差	-1.2	1.8 †		
	人文社会	81.1%	18.9%	201	
	標準化 残差	1.7 †	-2.7**		
	医歯薬	68.3%	31.7%	186	
	標準化 残差	-0.4	0.6		
	合計	70.8%	29.2%	665	
信仰を理由に同性愛やトランスジェンダーを 否定する発言をしている学生がいても教員は 注意できない	理工農 複合	36.1%	63.9%	263	6.60*
	標準化 残差	0.9	-0.6		
	人文社会	25.6%	74.4%	203	
	標準化 残差	-1.7 †	1.2		
	医歯薬	35.3%	64.7%	187	
	標準化 残差	0.7	-0.5		
	合計	32.6%	67.4%	653	

※有意確率は、Fisher の直接法による正確な有意確率（両側）を、\*\* p<.01, \* p<.05,  
† p<0.1として示した。

## ⑨まとめ

学問分野と性的マイノリティについての意識の関連性については、理工・農・複合および医歯薬学と比べ社会との接点が多い人文社会は知識・困難についての認識・存在の認知・出会った経験・差別的言動の認知割合が高く、抵抗感が低い、また医歯薬学と理工・農・複合の間には顕著な差は見られないとの仮説を立て分析をおこなった。

分析の結果、人文社会の教員は知識の正答率も高く、困難についての認識も高く、抵抗感も低かった。また周囲に存在していると答えた割合、そして同性愛・両性愛者およびトランスジェンダーの学生・教職員と大学で出会った割合も高く、差別的言動を認知する割合も高かった。さらに人文

社会の教員は、性的少数者の学生への対応に関して支援につながる認識を持っていた。以上については、仮説に沿った結果になった。

一方で、理工・農・複合においては困難についての認知割合、周囲に存在している・そうかもしれない人がいると答えた割合、そして差別的言動への認知割合が低かった。また医歯薬学は、同性愛者・トランスジェンダーへの抵抗感が強かった。またアウティングに関わる項目では学問分野による有意差は見られなかった。以上は、仮説に沿わない結果になった。

## 4 結論

性別については、女性のほうが知識をもち、困難についても認識し、抵抗感も低く、また周囲に性的少数者が存在していることを認知している割合も高く、差別的言動の認知する割合も高かった。一方で、性的マイノリティ学生への対応についての認識に関する設問では性別による有意な差は見られなかった。これらの項目に関しては、性別に関わらずアウティングやカミングアウトの強制につながる認識を持っていることが明らかになった。

年齢については、性的マイノリティへの抵抗感が20-30代において弱かった。また60代以上は抵抗感が強く、周囲に存在していると答える割合と差別的言動を認知する割合も低かった。一方で、20-30代が必ずしも性的マイノリティについての知識を持っているとは限らず、性的マイノリティが経験する困難についても十分に認識していないことがわかった。また、性的マイノリティへの対応についての認識に関しては年代間に有意な差は見られず、アウティング防止への意識等が希薄であった。

学問分野については、人文社会の教員は知識の正答率も高く、困難についての認識も高く、抵抗感も低かった。また周囲に存在していると答えた割合、そして同性愛・両性愛者およびトランスジェンダーの学生・教職員

と大学で出会った割合も高く、差別的言動を認知する割合も高かった。さらに人文社会の教員は、性的少数者の学生への対応に関しても支援につながる認識を持っていた。一方で、理工・農・複合は困難についての認知割合、周囲に存在していると答えた割合、そして差別的言動への認知割合が低かった。また医歯薬学は、同性愛者およびトランスジェンダーへの抵抗感が強かった。一方で、アウティングに関わる項目では学問分野による有意差は見られなかった。

以上を踏まえて、先行研究と同様に、性別では男性が、年齢では年齢の高い方が、受容度が低かった。また学問分野では、人文社会と比べて理工・農・複合、医歯薬学の受容度が低いことが明らかになった。

また、大学教員への啓発を進めていく上での課題も明らかになった。まず20-30代の教員が行政や他大学、学生支援機構等の取り組みに関する性的マイノリティに関する知識を有していないことや、就職活動における性的マイノリティの困難に関して認識していないことが明らかになった。この点に関しては、助教等の職位に就いている可能性が高く教授会等に出席していない年齢の若い教員には、十分に情報や啓発が行き届いてない可能性が考えられる。また、性的マイノリティ学生への対応についての認識は、性別、年齢、学問分野に関わらずアウティング、およびカミングアウトの尊重についての意識が希薄であり、啓発において重点的に取り組む必要性が明らかになった。

## 注

- 1 我々が2020年に実施した調査では性的少数者の学生支援の手引き、ガイドラインを作成している大学は8.7%であった(風間他2021)。
- 2 調査方法の詳細および調査票については(風間他2022)を参照のこと。
- 3 なお、情報学、環境学、複合領域、総合理工、数物系化学、化学、工学、総合生物、生物学、農学を【理工・農・複合】に、人文学と社会科学を【人文社会】にまとめた。また【医歯薬学】は調査票段階ですでに医歯薬学という選択肢にしているが、看護学や保健学の回答者も含んでいる。

## 引用文献

- 釜野さおり，石田仁，風間孝，吉仲崇，河口和也，2016，「性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書」  
<http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf>（最終確認 2023年9月21日）
- 釜野さおり，石田仁，風間孝，吉仲崇，河口和也，2019，「性的マイノリティについての意識：2019年（第2回）全国調査」報告会資料  
<http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/2019chousa.pdf>（最終確認 2023年9月21日）
- 釜野さおり，風間孝，北仲千里，林夏生，藤原直子，2022，「大学教員の性的指向・性自認（SOGI）についての知識と態度に関する全国調査報告①」第95回日本社会学会大会口頭報告
- 風間孝・北仲千里・釜野さおり・林夏生・藤原直子，2021，「大学における性的指向・性自認（SOGI）に関する施策及び取り組みに関する全国調査報告」『中京大学社会科学研究』41（2），181-230.
- 風間孝・北仲千里・釜野さおり・林夏生・藤原直子，2022，「大学教員の性的指向・性自認（SOGI）についての知識と態度に関する全国調査報告」『中京大学社会科学研究』42（2），120-152.
- 厚生労働省，2020，「事業主が職場における優越的な関係を背景とした言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置等についての指針」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000584512.pdf>（最終確認 2023年9月21日）
- 文部科学省，2015，「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/1357468.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm)
- 文部科学省，2016，「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20210215\\_mxt\\_sigakugy\\_1420538\\_00003\\_18.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210215_mxt_sigakugy_1420538_00003_18.pdf)（最終確認 2023年9月21日）
- 日本学生支援機構，2018，「大学等における性的指向・性自認の多様な在り方の理解増進に向けて」[https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/lgbt\\_shiryo.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/lgbt_shiryo.html)（最終確認 2023年9月21日）
- 日本学生支援機構，2019，「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（令和元年度（2019年度））」[https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_torikumi/2019.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2019.html)（最終確認 2023年9月21日）

日本学生支援機構, 2021, 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (令和3年度(2021年度))」 [https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_torikumi/2021.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2021.html) (最終確認 2023年9月21日)

虹色ダイバーシティ, 2023, 「地方自治体のパートナーシップ制度登録件数 (2023年5月31日時点)」 <https://nijiirodiversity.jp/6340/> (最終確認 2023年9月21日)

## 謝辞

本研究は「大学における性的指向・性自認に関する取り組みを促進するモデル作成についての研究」(JSPS 科研費 19K12619) の助成を受けたものである。